

着物文化を次世代に繋げていきたい

My 仕事 (128)

志お屋 代表取締役 井上和裕さん (千石町)

「変えていいものといけないものがあつて、そこはかなり意識して守っています」と話すのは、多賀駅前ずらん通りの呉服店・志お屋の代表取締役を務める井上さん。彼の言葉の端々からは着物文化への愛が感じられる。会社の経営理念は「不易流行」であるという。時代の流れに合わせて変えてゆくものと、変えてはいけない根底にあるもの。本記事を通して読者諸兄に伝えられれば幸いである。



るく元気にしてくる色が流行る時代もあります。そういった流行の傾向に対して、店に仕入れる商品の色調なども対応させています。

志お屋は昭和2年に私の祖父が興しました。創業当時からずっと千石町に店を構えていて、商いも着物を中心に扱い続けています。過去には雛人形を売っていた時代もあったので、総合的には和文文化に関わることを昔から続けていることになりましたね。

着物もファッション業界の一部ですから、やはり時代の風の潮流で支持される色や柄というものがあつて、モノトーンが人気を集めることもあれば、今年の流行色であるビバマゼンタのように明



上：昭和45年頃の志お屋 下：現在

対してのこだわりは、品質を持ち続けています。お客様の好みもありますが、うちの店ならではのセンスを常に磨きながら商品を取り揃えています。今の時代、普段着として和服を着ることもなくなりまして、コロナ禍でフォーマルな場に着物を着て出る機会も減ってしまいました。フォーマルが主体になる時代もあればカジュアルが流行する時代もあつて、3〜4年のスパンで入れ替わります。こだわ



艶やかで雅な店内

りを持って時代に合わせた商品を持っていく中で品質だけは守りたいと考えています。職人さんの伝統的な技術も守りたいのですが、今では職人の数が減ってしまいい作れないものが沢山出てきているのが現状です。そうすると今の時代に合わせた染色や織機の方法を取り入れられないといけないので、品質は守りつつ伝統技術を継承した新しい技法で作られたものを扱わなければいけません。また、絹や綿や麻といった天然素材由来の商品

そして人の手のかかったものには独特の温もり感が残ります。機械で自動的に作られた製品とは違いが明白に出るので、これからもひと手間かかったものにこだわって扱ってきたいです。

着物が敬遠される理由の一つに「履物が痛いから」という声があります。浅草の

とある草履(せうり)さんで履きやすい草履を扱っていると聞き、それを仕入れてみました。あのお客様がそれを履いて一日歩き回りましたが、履いていくことを忘れるくらい足が楽だったそうです。それからこの草履をずっと仕入れていますが、足への不安が無くなつたことで着物を着ることへのハードルが一段下がったことは、うちの店にとつてかなり大きな影響でした。

今の八十代以上の方は日常で着物を着ていた世代ですが、次の世代である五十〜六十代の方々は着物の知識を受け継いでいないんですね。近年、特に東京オリンピック開催が決まってから、日本文化をもつ一度見つめ直して世に発信しようという傾向が高まり、若い世代を中心に着物に興味を持つ人も増えてきました。ですが、着物に関して教えられる人がとても少ない

お金を貰えば終わりではないと思います。お客様にはご購入後も店に相談に来てもらいたいですし、着付けなど教えられたいです。できる限り教えたいです。「せっかく揃えていただいたのだから綺麗に着こなしてほしい」という思いに尽きます。お客様が着終わって最後に「お陰様で最後まで着崩れませんでした」「食事の時も楽でした」「皆から似合っていると褒められました」と言っていると聞いて初めて肩の荷が下ります。いい商売ができたなと感じる瞬間です。



和装小物がずらり



着物の加工リメイクもご注文承ります

くなつてしまつた。そうすると私たち呉服業の人間が着物の歴史・文化から扱い方・着方を教えていかないと、結局束の間の流行で終わり、文化を継承できなくなつてしまつたのではないかと心配しています。ですからお客様には着物に関するさまざまなことをお話しして、その時の流行で終わらせないで次の世代に繋げていってもらいたいと考えています。

商いというのは売ってお金を貰えば終わりではないと思います。お客様にはご購入後も店に相談に来てもらいたいですし、着付けなど教えられたいです。できる限り教えたいです。「せっかく揃えていただいたのだから綺麗に着こなしてほしい」という思いに尽きます。お客様が着終わって最後に「お陰様で最後まで着崩れませんでした」「食事の時も楽でした」「皆から似合っていると褒められました」と言っていると聞いて初めて肩の荷が下ります。いい商売ができたなと感じる瞬間です。